

(3) 道産小麦の主産地と適地 －適地と大面積とは異なる－

北海道の支庁別の小麦産地は、次表に示すように、作付面積順に平成10年でみると、十勝、網走、上川、空知、石狩、胆振の順になっています。また、平成10年の10a当たり収量で見ますと、十勝、網走、上川、石狩、胆振、後志の順になっており、作付面積が多い支庁が収量も多いという傾向となっています。

しかし、最近20年の10a当たり収量では、網走392、十勝373、石狩327、胆振・釧路293、上川291、空知289の順となっており、安定生産の目安である変異係数*では、上川・網走・空知が21.4・22.6・22.8%と安定性が高く、次いで石狩26.5、胆振28.6、十勝30.5、後志31.2の順で安定性は低くなっています。道央の石狩・空知や上川では、気象条件や作付面積などから見ますと、もう少し収量が上がってもよいと思われます。しかし、は種期の遅れや連作、雪腐病防除率が10%余りと少ないなどと管理不十分のため、生産性が意外と上がっていません。

支庁別作付面積・収量及び変異係数（千ha、kg/10a、%）

順位	平元面積	平10面積	平元収量	平10収量	平年収量	変異係数
1	十勝(41)	十勝(38)	網走(453)	十勝(516)	網走(392)	22.6%
2	網走(29)	網走(24)	石狩(421)	網走(421)	十勝(373)	30.5
3	空知(22)	上川(10)	釧路(403)	上川(364)	石狩(327)	26.5
4	上川(19)	空知(8)	後志(393)	石狩(344)	胆振(293)	28.6
5	石狩(8)	石狩(6)	胆振(380)	胆振(331)	釧路(293)	48.7
計	129.7	92.7	388	431	349	18.8

変異係数（CV）は、各支庁平年収量について、最近20年（昭和55～平11）で計算したものです

道央・道南は、現在ほど水田になっていない頃（昭和24～33）は、石狩（156kg）、胆振（143kg）、渡島（141kg）、空知（139kg）などと、石狩を除いて網走の156kgには及ばなかったのですが、十勝（118kg）をはるかに上回る収量を上げていました。したがって、現在の作付地帯は道東に移っています

が、小麦本来の栽培特性から見ますと、道東が適地ばかりでないといえます。とくに春まき小麦は、成熟期が秋まき小麦より約2週間遅いため、道東では収穫期の雨ぬれによる穂発芽のため、不安定な面がありますので、道央での作付と、基本技術をしっかり守っての栽培で、安定生産、安定供給が望まれるところです。

昭和20年代の小麦平均収量（昭和24～33の10年平均）

地域	全道	石狩	空知	渡島	上川	網走	十勝	胆振
収量	142	156	139	141	132	156	118	143
C.V	15.2	14.5	15.2	26.2	13.6	16.8	17.1	16.1

収量：10a当たりkg、C.V：変異係数%

農林水産統計

変異係数*：変動係数とも呼ばれ、標準偏差を平均値で除して%で表し、数字が小さいとふれが小さく安定性が高いことを示します

<佐藤 久泰>